

は　　じ　　め　　に

関西学院大学考古学研究会は、その研究会活動として、大学周辺に分布する古墳の調査研究を行ない、昨年度の『関西学院考古 2 号』で関西学院構内古墳の現状ならびに遺物報告をした。そのなかで、仁川流域に分布する上ケ原古墳群、五ヶ山古墳群、五ヶ山西古墳群、仁川旭ヶ丘古墳群を総合的に捉える必要性が提示されたのである。そこで今年度は、上ケ原古墳群、五ヶ山古墳群に関する資料のうち未発表のものを中心に整理し、仁川流域の後期古墳の研究考察を試みた。

上ケ原周辺の古墳については、すでに江戸時代に、五畿内志の内の一つである『摂津志』（享保 20 年、1735）の中に車塚古墳に関する記載がみられ、古くからその存在が知られていた。明治以降になると、紅野芳雄氏による遺跡踏査記録『考古小録』があり、その中で上ケ原周辺における数多くの古墳が紹介されている。しかし、大正年間の上ケ原浄水場の建設工事と昭和初期の関西学院の移転、及びそれに伴う急激な開発と宅地造成の結果、多数の古墳が消滅した。そのため、この紅野氏の 30 数年に渡る記録は旧状を知るための貴重な資料となっている。このほかに大正 7 年に刊行された『摂津郷土史論』に収められている喜田貞吉氏の「上代の武庫地方」の論稿や、小林行雄氏の「技術からみた古墳の様式」（『考古学』第 5 巻第 6 号、昭和 9 年 6 月）がある。特に小林氏の論文には、「摂津国武庫郡甲東村上ケ原古墳群 A 墳実測図」と A 墳を含めた分布図が掲載されており、上ケ原古墳群の過去の状態をうかがうことができる。（第 3 図）

昭和 28 年には宅地造成に伴う入組野古墳の緊急調査が武藤誠、渡辺久雄両教授を中心として行なわれた。また昭和 34 年に関西学院構内古墳の発掘調査が、同じく武藤教授を中心として関西学院大学文学部史学科生らによって実施され、数多くの遺物が出土している。

五ヶ山古墳群については、昭和 24 年の関西学院中学部の辻村恵治氏らによる分布調査において 14 基の古墳が確認されている。しかし、現在では 3 基が遺存しているにすぎない。

このうち、昭和 34 年に土地開発工事に伴い五ヶ山古墳群 1 号墳の緊急調査が正木明男氏らによって実施された。さらに昭和 36 年には西宮市史編集事業の一環として五ヶ山古墳群 2 号墳の発掘調査が武藤教授らによって行なわれた。また、昭和 47 年と 48 年に、五ヶ山古墳群 4 号墳と五ヶ山古墳群 3 号墳の墳丘実測調査を当研究会が実施した。

五ヶ山古墳群の西に五ヶ山西古墳群がある。同古墳群は昭和 48 年に発見され、現在 2 基の遺存が確認されている。さらに五ヶ山古墳群の東方には仁川旭ヶ丘古墳群が位置している。同古墳群は昭和 47 年に発掘調査され、現在では 2 基が遺存し、1 基が移築されている。

このように、上ケ原、五ヶ山両古墳群の旧状は著しく損われており、その全容を把握することは現在容易ではない。しかし、当研究会としては、今回両古墳群に関する未発表資料の整理報告を行なうとともに、合わせて両古墳群を含む仁川流域の復原と問題点に関して考察を進めてみたいと思う。

I 位置と環境

a. 位置と地理的環境

仁川流域の後期古墳は、仁川をはさんで西宮市と宝塚市の両市にわたる地域に、四つの古墳群を構成して分布している。それらは、上ヶ原古墳群^①、五ヶ山古墳群^②、五ヶ山西古墳群^③、仁川旭ヶ丘古墳群^④で、上ヶ原古墳群が仁川の南岸に位置する他は、北岸に3古墳群が位置する。上ヶ原古墳群は西宮市上ヶ原、上甲東園、仁川百合野町、五ヶ山古墳群は西宮市仁川六丁目、宝塚市仁川高丸、五ヶ山西古墳群は西宮市仁川六丁目、仁川旭ヶ丘古墳群は宝塚市旭ヶ丘にそれぞれ所在している。

仁川は六甲山附近にその源を発し、六甲山系の山々を東に流れ、甲山の東側で深い溪谷を通過し、上ヶ原台地北縁に達し、さらに平野にはいり小支流小仁川が合流して武庫川に注ぎ込む。仁川南岸に展開する上ヶ原台地は、かつて仁川が形成した中位段丘で、標高約40m～70mにわたる平坦面をみせている。台地はその東側で標高差約20mの崖によって明確に平野と区切られるが、北にゆくにしたがいこの崖は低くかつ不明瞭になる。また、台地北縁は段丘状の斜面を形成し仁川の河原と接している。

一方、仁川北岸では上ヶ原台地のような平坦地はみられず、小丘陵が起伏している。ただ標高140m～150mの五ヶ池附近から派生する尾根はわずかな高位段丘地形をとどめ、平坦地を形成して、仁川溪谷に急傾斜している。

このように仁川流域は六甲山東麓の台地、丘陵上に位置し、西方に秀麗な甲山を指呼の間に望み、東方に武庫川西岸の平地を見下し、さらに武庫川をへだてて広大な西摂平野を眺望している。

西摂平野は六甲山地、長尾山丘陵、千里丘陵に三方を囲まれ、南は大阪湾に面した平野である。この武庫平野とも呼ばれる平野を猪名川と武庫川の二大河川が南北に流れ潤いをもたらしている。一見平坦に見える西摂平野は地層的に見れば、尼崎市を走る阪急神戸線附近で、南北に伊丹礫層と沖積層に区分できる。伊丹礫層とは伊丹段丘とも呼ばれる低位段丘礫層で水田耕作に適さず、開墾も歴史時代にはいる。ただ川西市加茂遺跡は最明寺川西方の台地上に立地した弥生時代遺跡である。一方、二大河川が運んだ土砂が形成した沖積層は水田に適し、かつての河口附近には、尼崎市上ノ島遺跡^⑤、田能遺跡^⑥、武庫庄遺跡などの弥生時代の遺跡がみられる。

〔註〕

① 武藤誠「考古学上から見た西宮地方」・「埋蔵文化財調査記録」（『西宮市史』第1巻・第7巻 昭和34年）

関西学院大学考古学研究会「構内古墳現状・遺物報告」（『関西学院考古』第2号 昭和50年）

② ①に同じ

- ③ 西宮市教育委員会『西宮の文化財』埋蔵文化財篇（昭和49年）
- ④ 仁川旭ヶ丘古墳群調査委員会『仁川旭ヶ丘古墳群調査報告』（昭和47年）
- ⑤ 尼崎市教育委員会『尼崎市上ノ島遺跡』（尼崎市文化財調査報告第8集 昭和48年）
- ⑥ 尼崎市教育委員会『田能遺跡概報』（尼崎市文化財調査報告第5集 昭和42年）

b. 周辺の歴史的環境

ここでは古墳時代後期を研究対象として扱ったため弥生時代以前に関しては一応省略し、古墳時代に限って述べてみたい。

古墳時代前期の古墳の多くは、丘陵頂部やその裾に立地する。西摂において、この時期の古墳としては、宝塚市万籟山古墳^①、安倉古墳^②、池田市茶臼山古墳^③、娛三堂古墳^④、豊中市待兼山古墳、御神山古墳^⑤、西宮市稲荷山古墳^⑥、神戸市ヘボソ塚古墳^⑦、求処塚古墳^⑧などが知られている。円墳である娛三堂古墳、安倉古墳のほかは、すべて前方後円墳である。なかでも万籟山古墳は長尾山山系の尾根上、標高約200mに立地し、自然地形をうまく利用した代表的前期古墳として著名である。この古墳から猪名川をはさむ対岸の五月山丘陵には茶臼山古墳、娛三堂古墳があり、さらに箕面川南岸の刀根山丘陵には、待兼山古墳、御神山古墳がある。こうしてみると、猪名川が平野部に達する附近、特に東岸の丘陵上に前期古墳が立地することは注目できよう。

次に古墳時代中期になると、西摂の古墳は、前期の古墳より低い台地、または平地に集中する。猪名川東岸の千里丘陵西裾には豊中市桜塚古墳群^⑨が、西岸の平地には尼崎市、伊丹市にわたって猪名野古墳群^⑩がある。桜塚古墳群はかつて36基の古墳を数えた一大古墳群であったが、現在は、大石塚古墳、小石塚古墳、御獅子塚古墳、大塚古墳、南天平塚古墳の5基がかつての面影をとどめているにすぎない。猪名川西岸の猪名野古墳群は、伊丹市御願塚古墳^⑪、尼崎市大塚山古墳（天狗塚）^⑫、南清水古墳、池田山古墳、御園古墳^⑬がある。一方、旧海岸線には尼崎市伊居太古墳^⑭、水堂古墳^⑮、西宮市大塚古墳^⑯、芦屋市親王塚古墳^⑰が築かれ、前期のヘボソ塚古墳、求処塚古墳とともに、海上交通という点で注目できよう。

古墳時代後期に入ると横穴式石室を内部主体とした小古墳が、丘陵上に累々と造営され、群集墳の形態をとるようになる。六甲山系の南斜面においては芦屋市八十塚古墳群^⑱、長尾山山系においては長尾山丘陵の古墳群^⑲、千里丘陵においては豊中市たこ塚古墳群^⑳などが、こうした後期古墳として著名である。

芦屋市八十塚古墳群は、標高約60m～160mの丘陵尾根上にある。当古墳群は西より朝日ヶ丘支群、岩ヶ平支群、老松町支群、苦楽園5番町支群がそれぞれ尾根ごとに分布し、さらにこの4支群の北方丘陵上に剣谷支群がある。現在確認されている約40基の古墳は、6世紀後半から7世紀前半にかけて造営された。

長尾山丘陵の後期古墳は、丘陵のほぼ全域にわたり造営され、東西約4kmの範囲に分布している。古墳群は、宝塚市中山寺古墳、阪急山古墳群、稲荷山古墳群、庚申塚古墳群、山本古墳群、山本奥古墳群、平



第1図 西摂平野の古墳時代遺跡

井古墳群、雲雀山西尾根古墳群、雲雀山東尾根古墳群、雲雀ヶ丘古墳群、川西市勝福寺古墳^⑳といった2単独墳と9古墳群から構成され約150基の古墳を数える。このうち特に平井古墳群、雲雀山西尾根古墳群、雲雀山東尾根古墳群は終末期の様相を呈した無袖の横穴式小石室と箱式石棺のみからなる支群を含んでおり注目できる。

また、後期古墳^㉑には単独墳もみられ、前記の中山寺古墳や勝福寺古墳のほかには池田市鉢塚古墳^㉒、西宮市具足塚古墳などが知られている。

以上古墳^㉓について述べてきたが、古墳以外の遺跡としては尼崎市若王寺遺跡、下坂部遺跡^㉔などが平地の遺跡として知られており、窯址としては、千里古窯址群^㉕(豊中市、吹田市)が著名である。(坂井)

〔註〕

- ① 梅原末治「摂津万籟山古墳」(『日本古文化研究所報告』第4 昭和12年)
- ② 梅原末治「兵庫県下の古式古墳」(『兵庫県史蹟名勝天然記念物調査報告』第2輯 大正13年)
- ③ 堅田直『池田市茶臼山古墳の研究』(大阪古文化研究会学報第1輯 昭和39年)
- ④ 富田好久「古墳時代の池田」(『池田市史』史料編1 昭和42年)
- ⑤ 藤沢一夫「古墳文化とその遺跡」(『豊中市史』本編1 昭和35年)
- ⑥ 吉井良秀「摂津国武庫郡津門村の古墳と銅鐸」(『考古学雑誌』第3巻12号 大正2年)
紅野芳雄『考古小録』(昭和15年)
- ⑦ ②に同じ
- ⑧ ②に同じ
- ⑨ ⑤に同じ
- ⑩ 高井悌三郎「考古学から見た伊丹地方」(『伊丹市史』第1巻 昭和46年)
- ⑪ 村川行弘「御願塚前方後円墳に関する一資料」(『兵庫史学』第13号)
- ⑫ 梅原末治・小林行雄「園田村大塚山古墳とその遺物」(『兵庫県史蹟名勝天然物調査報告』第15輯 昭和16年)
- ⑬ 村川行弘「考古学からみた尼崎地方」(『尼崎市史』第1巻 昭和41年)
- ⑭ ⑬に同じ
- ⑮ 武藤誠「考古学上から見た古代の西宮地方」(『西宮市史』第1巻 昭和34年)
- ⑯ 武藤誠他「考古学上から見た芦屋」(『新修芦屋市史』本編 昭和46年)
- ⑰ 村川行弘「八十塚古墳群」(『芦屋市文化財調査報告第4集』 昭和41年)
- ⑱ 高井悌三郎「平井古墳群」(『宝塚市文化財調査報告第2集』 昭和47年)
- ⑲ ⑤に同じ
- ⑳ 石野博信「長尾山古墳群」(『宝塚市文化財調査報告第1集』 昭和46年)
- ㉑ 宝塚市教育委員会『宝塚市雲雀山古墳群』(宝塚市文化財調査報告第6集 昭和50年)

- ②④に同じ
- ②③ 西宮市教育委員会『具足塚』（昭和50年）
- ②④ 村川行弘「古墳時代の尼崎」（『尼崎市史』第1巻）
- ②⑤ 鍋島敏也・藤原学『千里古窯跡群』（昭和49年）

第1表 仁川流域の後期古墳調査一覧表

上ヶ原古墳群

年 度	調 査 古 墳 名	調 査 内 容	調 査 主 体 (者)	備 考 ・ 文 献
明治末～昭和13	上ヶ原古墳群	分布調査	紅野芳雄	『考古小録』
昭和 9	〃	分布・実測調査	小林行雄	『考古学』第5巻第6号
昭和28	入組野古墳	発掘調査	武藤 誠・渡辺久雄	消滅・移転 『西宮市史』(1)(7) 『関西学院史学』Ⅴ
昭和34	関学古墳	〃	武藤 誠 西宮市教育委員会	現存 『西宮市史』(1)(7)
昭和49	〃	実測調査	関学考古研	『関西学院考古』(2)

五ヶ山古墳群

昭和24	五ヶ山一帯	分布調査	辻村恵治	『西宮市史』(7)
昭和34	五ヶ山古墳群1号墳	発掘調査	正木明男	消滅・『西宮市史』(7)
昭和36	〃 2号墳	〃	武藤 誠 西宮市教育委員会	現存 『西宮市史』(7)
昭和47	〃 4号墳	墳丘実測調査	関学考古研 宝塚市教育委員会	現存
昭和48	〃 3号墳	〃	関学考古研	現存

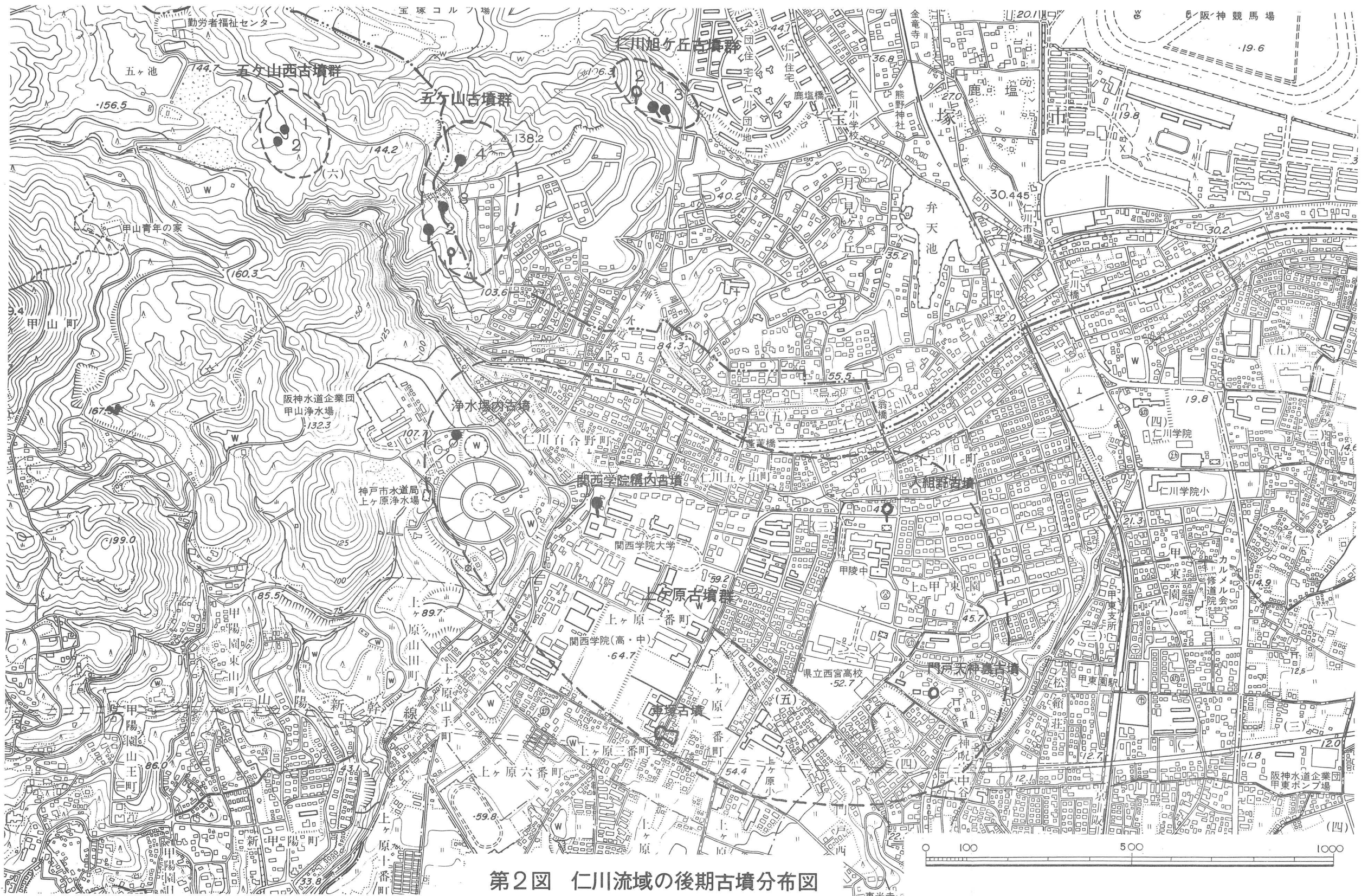
五ヶ山古墳群

昭和48	五ヶ山西1・2号墳	分布調査	武藤 誠 勇 正広	『西宮の文化財―埋蔵文化財篇』 『西宮市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』
------	-----------	------	--------------	--

仁川旭ヶ丘古墳群

昭和47	仁川旭ヶ丘古墳群 1・2・3号墳	発掘調査 実測調査	武藤 誠 仁川旭ヶ丘古墳群 調査委員会	2号のみ移転・消滅 『仁川旭ヶ丘古墳群調査報告』
------	---------------------	--------------	---------------------------	-----------------------------

昭和51年3月31日現在



第2図 仁川流域の後期古墳分布図

Ⅱ 遺 跡

a. 上ヶ原古墳群

(1) 関西学院構内古墳

〈位置と現状〉

関西学院構内古墳（以下関学古墳と略す）は西宮市上ヶ原一番町関西学院大学敷地内の西北隅に所在し、現在西宮市の文化財に指定されている。古墳の立地する地域は六甲山系の東端の独立丘、甲山東麓からなだらかに傾斜する上ヶ原台地で、標高 80 m 未満の地点である。なお上ヶ原浄水場から仁川河畔百合野町にかけての一带は古墳の群集が密な地区であったが、現在ではこの関学古墳と西側の一段高い標高約 100 m の地点に浄水場内古墳が所在するのみである。

関学古墳は昭和 34 年 3 月に西宮市史編纂のために武藤誠教授を担当者として発掘調査が行なわれ、『西宮市史』（第 1 巻、第 7 巻）に報告されている。

〈墳丘〉

関学古墳は仁川流域の古墳群の中でも最も保存状態のよい古墳であり、その墳丘もほぼ旧状をとどめている。しかし、墳丘の東側は削平のあとがあり、封土の流失が認められる。また、古墳の周囲には小径や小屋があって墳丘の基底部附近は明確にしがたいが、およそ西部で標高約 71.75 m、東部で 70.25 m の傾斜地に東西の基底部が考えられ、そこから直径約 18 m、高さ約 3 m の円墳を築造したものと考えられる。

〈石室〉

関学古墳の石室は主軸を N-12°E にとり、南に開口する狭長な平面プランをもつ右片袖式横穴式石室である。石室の規模は現存長 9.28 m、玄室長 4.98 m、羨道現存長 3.28 m、玄室奥壁幅が 1.50 m、羨道幅（玄室入口）1.2 m を測る。また、玄室部には 4 枚の天井石を架構し、その高さは 2.3 m である。玄室の両側壁は角のとれた、やや大形の花崗岩によって、6～7 段に横積みされ、左右からもち送っており、そのもち送り部分には直径 20 cm 程度の栗石を数多く用いている。奥壁には高さ 1.8 m、幅 1.5 m の巨大な一枚石を用いている。羨道は高さ 1.2 m、幅 1 m の大形の石を縦積みし、玄門としている。この部分の天井石は 1 枚だけ現存し、羨道高は 1.7 m を測る。羨道部は玄門部が狭く、入口附近になるほど幅狭くなっている。なお石室の石材は六甲山系南麓の群集墳一般にみられる黒雲母花崗岩の河原石を用いている。

〈遺物〉

関学古墳の遺物は、昭和34年に調査された際出土したもので、『西宮市史』（第1巻、第7巻）に報告されている。それらを列記すれば次のとおりである。

1. 容 器 須恵器 埴 2 杯 3（身2・蓋1）
2. 装身具 金環5 滑石製勾玉1 埋木製棗玉2 碧玉製管玉9 水晶製切子玉6 ガラス製小玉36
3. 武 器 鉄鏃4
4. 馬 具 革帶留金具1
5. 埋葬遺骸 太腿骨ほか骨片 歯

以下今回整理実測を行なった遺物について詳述を加える。

杯身〔1〕

口径1.22 cm、器高（復原）3.9 cmを測る。たちあがりは内傾し、その端部はわずかに外反し、丸くおさまる。受部は、ほぼ水平に外方へのびる。底部のヘラケズリは粗雑で、逆時計まわりで、ほかをナデ調整する。胎土、焼成ともに良好で、灰色を呈する。残存約2分の1。

杯蓋〔2〕

器径（復原）1.09 cm、残存高2.4 cmを測る。口縁部内面のかえり端部は尖って、その先端は口縁端部を尖出する。全体に薄手で、比較的丁寧に仕上げている。焼成、胎土ともに良好で、灰色を呈する。残存約6分の1。

杯身〔3〕

口径1.05 cm、器高3.7 cmを測る。口縁部はわずかに外反し、端部は丸くおさまる。内面及び外面体部はロクロナデを施し、底部は未調整。全体にかなり粗雑で歪曲している。胎土、焼成ともに良好で、灰色を呈する。完存。

埴〔4〕

口径7.4 cm、最大胴径9.8 cm、器高5.2 cmを測る。やや扁平な胴部にわずかに外反した頸部がつく。頸部は高さ1.0 cmを測り、口縁端部は丸くおさめてある。内面底部は仕上げナデ、底部はヘラケズリを施し、ほかはロクロナデで仕上げる。外面胴部の一部に灰釉がかかる。胎土、焼成ともに良好で、暗灰色を呈する。頸部の一部が破損しているが、ほぼ完存。

埴〔5〕

口径7.8 cm、最大胴径11.4 cm、器高（復原）7.1 cmを測る。口縁部はわずかに外反し、端部は内面と外面を明瞭に分ける。外面底部にヘラケズリを施し、ほかはロクロナデで調整する。胎土、焼成ともに良好で暗青灰色を呈する。残存4分の3。

〈小結〉

関学古墳の特徴を内部主体について列記すれば、

1. 狭長な平面プランをもつ。
2. 石室には左右からのもち送りがみられる。
3. 石室を構築している石材は角のとれた河原石である。

次に遺物についてみた場合、関学古墳は古くから開口しており盗掘をうけたと思われるが、出土遺物から考えると、装身具については、大きさの異なる金環が5個あることなどから少なくとも5人が埋葬されたと思われる。また、古墳時代後期後半の古墳において、玉類の副葬が減少していく中で、当墳では、それらが豊富にみられている。特に滑石製の勾玉は、古墳時代中期の古墳に多くみられるものであるが、当墳出土遺物のように後期後半の古墳から出土する例は珍しいといえよう。

次に須恵器については、6世紀後半期の杯が出土している。また7世紀初頭の杯も出土しているので、追葬が行なわれたと考えられる。

以上のように当墳は、遺構遺物からみた場合、6世紀後半に造営されて第一次埋葬が行なわれ、少なくとも7世紀初頭まで5回以上にわたって追葬が行なわれたと思われる。(小島・坂井)

(2) 門戸天神裏古墳

〈位置と現状〉

平坦な上ヶ原台地は東にのびるにしたがって、幾つかの小さな尾根を形成するとともに、急峻な崖になって平地に連なっている。門戸天神裏古墳は、現在県立西宮高校の敷地附近からのびた台地尾根上の突端、標高約40mの地点に立地していたが、現在は消滅し宅地になっている。墳丘、石室は共に不明であるが、出土遺物として須恵器が採集された。

〈遺物〉

採集された遺物は須恵器に限り、鉄器などは含まれない。

杯身〔7〕

口径13.6cm、高さ3.6cm(残存高)を測る。底部にヘラケズリを時計まわり方向に施す。胎土には砂粒を若干含み、暗灰色を呈する。焼成は良好。底部中央部は破損しているが約4分の1残存。

杯蓋〔8〕

口径14.8cm、高さ5.0cmを測る。天井部と体部を分ける稜線はなく丸くおさまる。天井部にはヘラケズリが逆時計まわりに粗く施されており、その範囲は、天井部全面に広がる。口縁端部は、端面と内外面

とをわけける稜線は明瞭である。内面はロクロナデ、中央部は同心円文のあとに仕上げナデを施す。

焼成は良好で、暗灰色を呈する。完存。

杯身〔 9 〕

杯蓋〔 8 〕と対をなす。口径 1 3.4 cm、高さ 4.5 cm を測る。たちあがり、受部先端ともにまるくおさめられている。たちあがりは比較的発達している。受部は上向きに外方にのびている。底部にはヘラケズリを時計まわりに施し、その範囲は、杯蓋〔 8 〕同様ひろい。

暗灰色を呈する。口縁部が一部破損。

つまみ付蓋〔 6 〕

つまみの形態、大きさより高杯の蓋と考えられる。

台付長頸壺〔 10 〕

口径は 1 1.0 cm、頸部と肩胴部の接合部は、5.7 cm、最大胴径部は 1 4.2 cm を測る。頸部に二条の凹線を施し、肩胴部にも同様の凹線が 2 本めぐらされ、間に櫛による刺突列点を施す。また、脚台部は、三方透しを入れる。頸部、肩胴部、脚台部を接合した後、ロクロナデで仕上げ、胴部下半は、ヘラケズリで調整する。脚台部下半が損欠し、残存高は 2 6.5 cm を測る。

焼成は硬く良好で、暗灰色を呈し、全体のほぼ片面に自然釉が見られる。

壺〔 11 〕

体部最大径 1 0.6 cm、口頸部。体部接合部径 3.7 cm を測る。口縁部は欠損しており、残存高 1 3.7 cm を測る。口縁部は段をなしており、頸部につづくが、細くくびれていない。頸部はカキ目で調整するが、下半部はナデで消した痕を残す。体部は肩に 2 条の凹線をめぐらし、中央はカキ目調整を行なう。底部はヘラケズリで仕上げてある。

胎土、焼成とも良好で、灰色を呈する。

壺〔 12 〕

体部最大径 9.1 cm、口頸部・体部接合部径 3.7 cm を測る。

口頸部は、細くくびれ、体部につらなる。頸部及び体部の肩に、比較的太い凹線をめぐらし、ナデ調成を行ない、底部は、ヘラケズリで仕上げる。また、頸部内面にシボリ痕をわずかにとどめる。

口縁部は欠損し、残存高 1 2.3 cm を測る。

大型器台〔 13 〕

杯部は口径 3 4.7 cm（復原）を測る。口縁端部は外反し、まるくおさまる。体部に二条の凹線をめぐらし、その上方に波状文を施す。凹線の下方に格子目の叩き痕を残し、内面底部は、同心円文叩きを残している。

脚部は 2～3 条の凹線を 5 段にめぐらす。最上段は、円形透しがつき、2・3 段目は、あらい波状文に三角形三方透しをつけ、最下段は、幅の狭い波状文を施すのみである。脚端部はわずかに外反し、丸くおさまる。脚径は 3 3.0 cm を測る。

杯・脚部は別に成形し、接合している。全体に歪んでおり、直立しない。また、脚下半は著しく歪曲し、きれいな円弧をえがいていない。残存約2分の1。

〈小結〉

門戸天神裏古墳は、この地域において比較的古い相様を呈すると考えられる。

まず、出土遺物の杯〔7・8・9〕は、『陶邑古窯址群』の形式編年、TK10に類似している。現在までに報告された仁川流域の古墳群の出土遺物の中では、最も古い形態を示している。次に大型器台〔13〕は、杯の形態から『千里古窯址群』のST37から出土したものと同形式であると考えられるが、大型器台は、周辺及びこの地域の古墳からは殆ど出土例がなく、わずかに芦屋市八十塚A号墳から脚部のみが出土しているにとどまるのは注目される。また、古墳の立地については、上ヶ原台地の東端で尾根の先端部を占めて平地から眺めることを意識した地点に築かれており、独立墳の観を呈している。こうした例としては、他に西宮市具足塚古墳がある。

墳丘、石室は不明であるが、以上の点を考慮すれば、門戸天神裏古墳の築造年代は、上ヶ原台地上の車塚古墳とともに、他の周辺の古墳より先行すると考えられる。言いかえれば、車塚古墳、門戸天神裏古墳が築造された後に、上ヶ原、五ヶ山、仁川旭ヶ丘の群集墳が造られたのであり、その年代は、6世紀の前半から中葉にかけての時期に比定しうる。（坂井）

〔註〕

① Ⅰb⑰に同じ

(3) 関西学院テニスコート附近

〈位置と現状〉

上ヶ原台地はその北側で、関学古墳附近から仁川の河原にむかって傾斜する。現在この斜面は削平され関西学院テニスコートになっているが、かつては古墳が存在していたことが知られている。ここでは、当地区では採集された古墳の副葬品と考えられる遺物を一括して扱った。

〈遺物〉

杯蓋〔14〕

口径13.4cm、器高4.25cmを測る。口縁端部は内傾する面を有し、稜をつくり内面へつらなる。天井部のほぼ全域にヘラケズリを時計まわりに施し、ほかはロクロナデで仕上げる。全体に比較的丁寧につくる。胎土に砂粒を含み、特に大きいものは3mmほどある。焼成は良好、内面は灰色、外面は暗灰色を呈する。完存。

杯身〔15〕

杯蓋〔14〕と対をなす。口径12.2cm、器高4.5cmを測る。たちあがりは低く内傾し、端部は丸くおさまる。受部はやや上向きに短く外方にのびる。底部はヘラケズリを時計まわりに施し、他はロクロナデで調整する。杯蓋〔14〕同様、全体に比較的丁寧につくっている。胎土に4・5mmの石を含む。焼成は良好。内面は白灰色、外面は灰色を呈する。完存。

脚台〔16〕

脚径10.0cm、残存高4.6cmを測る。二方透しを配し、内外面ともにロクロナデを施す。胎土、焼成ともに良好で青灰色を呈する。

台付長頸壺〔17〕

径5.3cmを測る頸部に最大径16.9cmを測る肩胴部がつき、さらに脚台がつく。残存高は16.8cmを測る。頸部から肩部にかけてはロクロナデを施すがシボリ痕を残し、胴部には2条の凹線をめぐらし、さらにその間に斜行櫛描列点文を配する。胴下半部は逆時計まわりのヘラケズリを施し、脚台を付しナデ調整する。胎土は砂粒を若干含み、焼成は良好、灰白色を呈する。

〈小結〉

関西学院テニスコート付近は関学古墳に近く、同じ上ヶ原古墳群中に含まれる。古墳は、一基も現存しておらず、またかつての分布状況や、古墳の墳丘および内部構造を明確に把握しえないが、採集遺物〔14・15〕は、6世紀後半でも早い時期を示し、ここに存在した古墳は、この時期に築造されたものを含むものと考えられよう。(坂井)

b. 五ヶ山古墳群

(1) 五ヶ山古墳群1号墳

〈位置と現状〉

五ヶ池附近に派生しほぼ東にのびる尾根は、約500～600m続く平坦地を形成し、東と南の二方に大きく分岐した後、標高約135mを境に急傾斜する。五ヶ山古墳群はこの尾根が分岐する地点から仁川と平行して南北に走行する尾根上南北約300mの範囲に分布する。古墳の存在する尾根の東斜面は、現在ほとんど宅地となって著しく旧状を損い、かつての景観をとどめていない。また、尾根の平坦地も改変され、五ヶ山古墳群3号墳、五ヶ山古墳群4号墳の間は大きく削られ人工の谷になっている。ちなみに附近一帯には、弥生時代中期から後期の土器が散布しており住居址などの遺構も確認されている。

①
五ヶ山古墳群1号墳は当古墳群中、最も南に位置し、仁川溪谷に急傾斜する西斜面の尾根稜線に近い標高約135mの地点に立地する。当墳は昭和34年に宅地造成のため消滅したが、破壊される段階で緊急

に調査が実施された。その調査記録が『西宮市史』第7巻に記載されている。ここでは出土遺物のうち新たに須恵器の実測の報告を行なった。

〈墳丘〉

調査された時点ですでに大半が破壊されており、墳丘の形、規模など詳細は不明である。

〈石室〉

正南北に主軸をおき、南に開口する横穴式石室である。石室の規模は、幅1mを測り、高さ1.4mを測る。羨道部は破壊されていたため、石室の全長は不明であるが、残存部は4mを越える。

石室石材は、奥壁に一枚石を使用している。また床面には、こぶし大の礫石を敷きつめている。

〈遺物〉

床面から次の遺物が検出された。

1. 容 器 須恵器 杯身1 高杯2
2. 装身具 金環（銅心金張り）1
3. 馬 具 轡具（鏡板）1 革帯の金具9 鞍飾金具1 刀子9
4. 棺 具 鉄釘7

〔以下今回整理実測を行なった遺物について詳述を加える。〕

杯身〔18〕

口径12.2cm、器高3.6cmを測る。

たちあがりは低く、内傾し、受部はやや上向きに外方にのびる。全体に浅く扁平である。底部のヘラケズリは粗雑で、時計まわりに施されている。ほかはナデで仕上げ、内面底部に仕上げナデを行なう。焼成は良好で胎土に2～3mm大の砂粒を含む。色調は灰色。完存。

高杯〔19〕

口径13.2cm、器高5.4cmを測る。著しい短脚で、全体に扁平である。杯部下半は、逆時計まわりのヘラケズリ、内面底部は、同心円文の上から仕上げナデを行ない、ほかはナデで調整する。口縁・脚部端部はともに丸くおさまる。

高杯〔20〕

口径12.2cm、器高5.1cmを測る。高杯〔19〕よりひとまわり小さいが、杯部は若干深く、脚端部はわずかに尖っている。成形、調整は、同じ手法による。

高杯〔19・20〕はともに焼成がやや悪く、胎土に砂粒を含み、灰色を呈する。

〈小結〉

墳丘が不明であるうえ、石室の全様を把握できないが、出土遺物の須恵器（杯身）は、形式編年から6世紀末頃にあたり、築造年代もほぼこの時期が考えられよう。

ただ、石室規模が周辺の古墳のうちで小型であることは注目でき、無袖の石室形態の可能性も考えられるだろう。（坂井）

〔註〕

① 西宮市教育委員会『西宮市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』（昭和49年）

(2) 五ヶ山古墳群 3号墳

〈位置と現状〉

五ヶ山古墳群 1号墳から北西へ約80mの南西に派生した支尾根上標高約135mの地点に、五ヶ山古墳群 2号墳が立地する。五ヶ山古墳群 3号墳は五ヶ山古墳群 2号墳から北方へ約100mの尾根上、標高約140mに立地する。当墳は、尾根頂部につくられており、西側斜面につくられた五ヶ山古墳群 1、2号墳と立地条件を異にする。現在はハイキングコースの休憩展望台に利用されている。

なお、墳丘実測調査は昭和49年8月に実施した。（第3図）

〈墳丘〉

墳丘の封土は、一部流失し、3枚の天井石と一部の側壁が露出している。

石室は主軸をN-5°Eにとり、南に開口した横穴式石室である。

まず墳丘について詳しく観察すると、西側は道路のため若干削平され、小さな段をなしており、北側は大きく削りとられ人工の崖になっている。東側は少し平らな面をみせた後、傾斜し、石室から12～13mで北側同様崖になっている。南側はほぼ平坦で、道路とつながっている。

旧状を保っていると考えられるのは東側であり、この部分の傾斜からすれば、139.50mのコンターラインが、ほぼ墳丘の基底部と考えられ南側の140.25mのコンターラインの曲線と考え合わせると、径約13m、高さ約2.5mの円墳であると推定できる。

また、石室の規模は、外形から判断すると、全長約7m、幅約1mを測る。玄室と羨道の区別は明らかでない。

〈小結〉

発掘調査がなされてないため、出土遺物から築造時期を比定することはできないが、墳丘、石室規模などからすれば、この地方に後期古墳が盛んに造営された時期、すなわち6世紀後半から7世紀初頭に築造

されたと考えられる。(坂井)

(3) 五ヶ山古墳群 4 号墳

〈位置と現状〉

五ヶ山古墳群 4 号墳は、五ヶ山古墳群 3 号墳の北方約 150 m、標高 142～143 m の尾根のほぼ頂上部に立地し、当古墳群中、最も北に位置する。現在は史跡公園に利用されている。

なお、墳丘実測調査は昭和 48 年 3 月に実施した。(第 4 図)

〈墳丘〉

墳丘は旧状を著しく損じているので、構築当時の規模を確認することは困難である。しかし、石室の現存長などから推定すると墳径 18～20 m の円墳であったと考えられる。

〈石室〉

石室は、主軸を N-19°-E にとり、南西に開口している。その規模は、石室奥壁幅 1.4 m、石室現存長 10 m を測る。石室高は不明であるがおよそ 2 m 余りであろう。石材はかなり大形の花崗岩を使用している。

〈小結〉

当墳については、発掘調査が行なわれていないため、内部施設や遺物については全く不明である。しかし、当墳もこの地方に盛んに古墳が築造されていた時期(6 世紀後半～7 世紀初頭)に造営されたものであろう。(岩橋)

付載 獅子ケ口出土の須恵器〔30〕について

本文の内容とは直接の関係はないが、関学考古学研究会の所蔵する遺物のうち、西宮市獅子ケ口から出土した須恵器を紹介しておく。この提瓶の出土した獅子ケ口附近には夙川学院構内古墳(消滅)や神園古墳など若干の後期古墳が分布している。現在の状況からは何ともいえないが、これより^①、夙川上流の一帯に、八十塚古墳群と仁川流域の古墳群の間をうめる群集墳が存在していた可能性も看取されうるであろう。

なお杯蓋〔27〕・甕〔28〕・小型提瓶〔29〕の三点は、全く出土地不明の遺物であるが、この機会にあわせて掲載した。

〔註〕

① 檀本誠一ほか「夙川学院構内古墳調査報告」(『兵庫県埋蔵文化財調査集報第1集』昭和46年)

Ⅲ 考 察 と ま と め

a. 仁川流域の古墳群の分布状況

すでに述べてきたように、仁川流域の古墳群は現在その旧状が著しくそこなわれているが、ここでは現存する古墳や過去の記録などをもとにして、かつての分布状況の復原とその構造を考えてみたいと思う。

〈上ヶ原古墳群〉

仁川南岸の上ヶ原古墳群は、大きく分けて、3基の独立墳と一つの群集墳とに分けられる。

3基の独立墳は、車塚古墳^①、門戸天神裏古墳ならびに、入組野古墳^②であるが、現在は3基とも消滅している。車塚古墳は、関西学院中学部附近の台地平坦部に、また、門戸天神裏古墳は、上甲東園の台地の東端部に、そして入組野古墳は甲陵中学校西方の台地の北縁端にそれぞれ築かれた。このように上ヶ原古墳群の3基の独立墳は台地上あるいはその先端部に築かれたのである。

次に上ヶ原古墳群の群集地区は現在2基しか遺存していないため正確な分布状況や支群構成を把握することは困難であるが、紅野芳雄氏の『考古小録』や小林行雄氏の論文^④などからある程度の規模は復原できる。その主な群集地区をあげてみると次のごとくである。

(1) 浄水場周辺地区

(2) 仁川河畔百合野地区

(3) 関学テニスコート、心理学研究館周辺地区

(4) 関学古墳周辺の河畔より一段高い地区

以上の四つが上ヶ原古墳群の主な群集地区であったと思われる。次に個々の群集地区についてみていく。

(1) 浄水場周辺地区

『考古小録』によれば、大正3年と4年の頃の浄水場の建設工事によって多数の古墳が消滅したという記載があり、現存する浄水場内古墳の周辺に古墳が密集していたことが推定できる。

(2) 仁川河畔百合野地区

『考古小録』昭和7年の記載には、上ヶ原新田墓地遺跡上の3基の古墳が破壊され、墓地東方の松林中の約14の古墳が住宅地建設のため破壊されたと書かれている。このことから、現在の仁川百合野町の住宅街附近に古墳が群集していたことが知られる。

(3) 関学テニスコート、心理学研究館地区

関学テニスコート建設の際には、古墳が数基消滅しており、小林行雄氏の分布図(第3図)もテニスコ

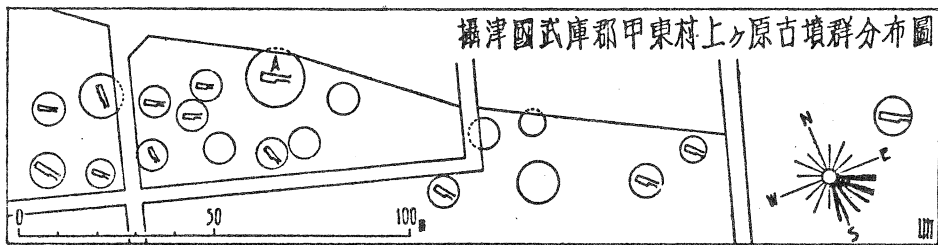
ートすぐ東の心理学研究館附近のことと思われ、この附近の群集が考えられる。しかし、百合野町から心理学研究館にかけてどのように群集が続いていたかは不明である。また、『考古小録』による墓地東方の約14の古墳というのは小林氏の分布図と重複することも考えられる。

(4) 関学古墳周辺地区

関学古墳周辺は仁川河畔の群集地区よりも一段高い地点にあり、それより南にあった池の端にも古墳があったことから、河畔地区と分けて考えることが可能であろう。

このように上ヶ原古墳群は現在2基しか残っていないが、かつては群集墳としてかなりの数の古墳が存在していたことが考えられる。その範囲と規模は、西端が現在の浄水場内古墳附近で、そこから東は関西学院の心理学研究館あたりまでの東西約600m×南北300mの範囲を有し、数10基の古墳がその中にいくつかの支群にわかれて存在していたものと思われる。また、この群集墳は3基の独立墳の築かれた台地上やその先端部から離れて、仁川に面して傾斜する地点から河畔部にかけて分布している。この分布状況からみて、上ヶ原古墳群の中でも、独立墳と群集墳とは分けて考えた方が妥当のように思われる。

(第4図)



第3図 小林行雄「技術から見た古墳の様式」(『考古考』第5巻第6号)より

〈五ヶ山古墳群〉

仁川北岸の五ヶ山古墳群は、すでに述べてきたように、近年の土地開発などによって地形は改変し、現在では五ヶ山古墳群2～4号墳の3基が遺存しているにすぎない。このためかつての古墳の分布状況は明確ではない。しかし、昭和24年の調査では、宝塚市との境界となっている尾根線上に6基、また南東へのびる尾根から分岐して東へのび、宝塚市域に入る尾根とその南斜面に8基の計14基が確認されている。^⑥このようにかつては10数基の古墳が仁川に面した丘陵稜線上に築かれていたことが知られる。

〈五ヶ山西古墳群〉

五ヶ山西古墳群は標高152m、南北に走る尾根から西へ角度をかえる地点に2基存在している。そのうちの1号墳は石室形態からみて竪穴式の小石室であると考えられ、石材にはほとんど、丸みのある花崗岩の河原石を使用している。^⑦

〈仁川旭ヶ丘古墳群〉

仁川旭ヶ丘古墳群は、五ヶ山弥生遺跡附近から東へのびる丘陵稜線上から一段低い稜線上標高65～75mの小仁川に向かって傾斜する地点に立地している。昭和47年の調査では3基の古墳が確認され、そのうち1基が発掘調査されている。現在ではこのうち2基が遺存しているが、この3基をもって一つの支群が形成されていたことが知られる。^⑧

以上のような分布状況から、仁川流域の古墳群を考えると、上ヶ原古墳群の独立墳3基は台地上またはその先端部に築かれているのに対し、群集墳は台地上に築かず、仁川に面して傾斜する地点から河畔部にかけて築かれている。また、仁川北岸の五ヶ山古墳群、五ヶ山西古墳群、仁川旭ヶ丘古墳群の3群集墳も上ヶ原の群集墳と同じように仁川あるいは小仁川に面して傾斜する地点に築かれている。このように、仁川流域の群集墳に限っていえば、いずれもが仁川あるいは小仁川という河川を意識して造営されたと推定できよう。

b. 仁川流域の古墳群の形成時期

仁川流域の古墳群の中で比較的古い時期に築造されたのは、上ヶ原古墳群の車塚古墳と門戸天神裏古墳である。車塚古墳は大正年間に消滅して詳細は明らかでなく、遺物も残っていないが、横穴式石室を有した前方後円墳であったということから、6世紀前半頃につくられたのではないと思われる。また、門戸天神裏古墳はすでに述べてきたように、6世紀前半から中葉にかけて築造されたものであろう。

次に上ヶ原古墳群の群集地区の中で、関学古墳は出土した須恵器及び石室の形態からみて6世紀後半に築造されたものと考えられる。また、大きさの異なる5個の金環や、7世紀初頭の須恵器も出土しており、5回以上の追葬が考えられる。関学古墳以外、浄水場内古墳周辺や百合野町附近に群集した古墳などの中で、築造時期を推定する資料はほとんどないが、関学テニスコート附近から6世紀後半の須恵器が出土しており、関学古墳と時期の重なる古墳が多かったと思われる。このように上ヶ原の群集墳は、6世紀後半から7世紀初頭にかけて形成されたとみたい。

一方、仁川北岸の五ヶ山古墳群では、五ヶ山古墳群第1号墳において6世紀末頃の須恵器が出土している。また五ヶ山古墳群2号墳においては7世紀初頭の須恵器が出土している。^⑨追葬の可能性を考えると個々の古墳の築造時期は明確にしがたいが、五ヶ山古墳群はおよそ6世紀後半から7世紀初頭にかけて形成されたものと思われる。

次に仁川旭ヶ丘古墳群では、仁川旭ヶ丘古墳群2号墳の玄室部から6世紀末頃の須恵器が出土しており、五ヶ山古墳群と同時期の築造が考えられよう。^⑩

また、五ヶ山西古墳群は、発掘調査がなされていないので遺物はなく時期は不明だが、五ヶ山西古墳群1号墳は小型の竪穴式小石室を有しており、仁川流域の古墳群の中では特異な形態であるが、6世紀後半

から7世紀前半までに築かれたと思われる。

最後に、群集墳以降の古墳としては入組野古墳^⑪があげられよう。この古墳は全長2.3m、幅0.66m、高さ0.9mを測る小規模の無袖式横穴式石室を有する小円墳である。昭和28年の調査では遺物を検出できなかったが、その石室形態からみて7世紀にはいつてから築造されたものと思われる。

以上のように仁川流域の古墳群の形成時期をみてきたが、先述の分布状況と考えあわせれば次の3点に要約できよう。

(1) 6世紀前半から中葉

上ヶ原台地上及びその先端部に2基の独立墳、車塚古墳と門戸天神裏古墳が築かれた。

(2) 6世紀後半から7世紀初頭

仁川あるいは小仁川に近接して四つの群集墳、上ヶ原古墳群、五ヶ山古墳群、五ヶ山西古墳群、仁川旭ヶ丘古墳群が築かれた。

(3) 7世紀以降

上ヶ原台地先端部に群集墳以後の独立墳、入組野古墳が築かれた。

このように仁川流域に古墳の群集がはじまるより以前には、盟主的ともいうべき二つの独立墳が築かれ、また、群集墳の築造がある程度終わった時期には、独立墳の入組野古墳が築かれている。このような点は、群集墳との関連を考える上で非常に重要な問題である。(小島)

c. その他の問題点

本号で収録した、上ヶ原・五ヶ山・五ヶ山西・仁川旭ヶ丘の各古墳群は、それぞれ六甲山系の丘陵上に所在しているが、その丘陵の眼下には、武庫川の氾濫によって形成された沖積平野、いわゆる武庫平野が広がっている。丘陵上に古墳を造営したのは、おそらくこの武庫平野に居住していた人々であったかと想像しうるが、もとより6世紀後半の時点に、この地方に関する確固たる文献史料は存在せず、後世の史料をもって、群集墳の被葬者を考える若干のほう助とするのみである。

「武庫」は、『日本書紀』神功皇后条に「務古」に作り、『万葉集』では「六児」、『新撰姓氏録』では「牟古」と記し、すべて「ムコ」と読ませている。これは、賀茂真淵が『冠辞考』において、「此地海頭へさし出る地にて難波より向はるゝ故に向と云ふ歟」と考証し、「武庫」という地名を、難波から向う側の土地という意味に解釈している。真淵以後、諸家はすべてこの説をとっている。^①このようにみると、武庫地方は、律令時代以前にはかなりの広域であったことが知られる。さらに、『日本書紀』には、「務古(武庫)水門」、「武庫海」とみえ、武庫地方は、港や海と結びついていることが注目される。これは、古来より武庫の地が、大和朝廷にとって海上交通の要地であったことを示すものであろう。武庫川以西の海岸線に、多くの前・中期古墳が点在していることは、すでにみたとおりである。

以上のように、武庫地方は早くから海上交通の要地として、その存在を知られていたわけであるが、次

に武庫平野、つまり武庫川流域の平野部の開発の時期を考えてみたい。

まず、武庫川東岸の平野部（現在の尼崎市）には、弥生時代前期の上ノ島遺跡をはじめとし、中期の武庫庄遺跡など多くの弥生・古墳時代の遺跡が知られており、早くから開発が進んでいた。これに対し、武庫川西岸の平野部（現在の西宮市）においては、ほとんど無遺跡地帯に等しく、西宮神社周辺で少量の弥生式土器、土師器が検出されたのにとどまり、東岸の平野部とは対照的である。武藤先生は、その理由を、^③「ただこの地域では、丘陵上や山麓台地とちがって、それ以後の生活が同じ地域でいとなまれ、また、長年月にわたって沖積作用がくりかえされたために、当時の生活の痕跡はあるいは破壊消滅するか、あるいは地下にかくれ、そのため発見の機会なく今日にいたったのであろう。」と推測されている。このように考えれば、武庫川西岸の平野部の開発の時期は、今後の調査に待つより他はなく、現在では、仁川流域の丘陵上に古墳が造営された6世紀後半に、どれほどの平野部が開発されていたかは不明といわざるをえない。

また、武庫川流域には、渡辺久雄氏によって条里制が復原されているが、この条里をもって武庫川の西岸の大規模な開発が古墳時代にまでにさかのぼるとは考えがたく、武庫川東岸と条里の方向が同じであることをみれば、この条里はむしろ武庫郡成立以後のものにとらえられよう。^⑤

注目されるのは、車塚と呼ばれる後期の前方後円墳の存在である。現在、車塚は消滅しており、その規模・内容などは不明であるが、「上ヶ原新田絵図」などから6世紀前半頃の横穴式石室を有する前方後円墳であったかと推定されている。^⑥この車塚は古くから知られており、吉井良秀氏は、『日本書紀』神功皇后条にみえる「葉山媛」をその被葬者にあてておられる。^⑦また、「葉山媛」が「山背根子之女」にあたることから、上ヶ原一帯（『日本書紀』には「広田国」と記す）には、古くから山背（山代）氏が勢力を張っていたと類推されている。「葉山媛」の実在性などからみて、この比定には無理があるにしても、車塚の被葬者（複数の可能性もある）が、6世紀前半における上ヶ原一帯の有力豪族であったことは事実であろう。

次に、群集墳を造営した人々を後世の史料から類推してみる。律令時代になると、武庫平野は「摂津国武庫郡」と呼ばれる。武庫郡は、平安時代後期にできた『倭名類聚抄』によれば、賀美・兜屋・武庫・石井・曾禰・津門・^{つと}広田・雄田という八つの郷からなっていた。卹岡良弼の『日本地理志料』巻之五では、武庫郡の範囲を、「東至河辺郡、南至海、西至菟原郡、北至有馬郡、管郷八」とし、さらに具体的には、「戸田、鳴尾、仁部、浜田、大島、瓦林、広田、大市、領家、武庫、十荘」をあげている。これを現市域でいえば、武庫川東岸の尼崎市・伊丹市・武庫川西岸の西宮市・宝塚市にあたる。

律令時代において、武庫郡に居住していた氏族を、先にみた郷名から、『新撰姓氏録』の中にみえる同名の氏族を拾うと次のようである。^⑧

上村主 広階連同祖。陳思王植之後也。（摂津国諸蕃）

牟古首 出自百濟人汗汜吉志也。（摂津国諸蕃）

曾禰連 采女臣同祖。（和泉国神別）

津門首 櫟井臣同祖。米餅搗大使主命之後也。（摂津国皇別）

広田連 出自百濟人辛臣君也。(左京・右京諸蕃)

また、宝塚市蔵人などの現在の地名から、次の2氏族の存在も考えられている。^⑨

蔵人 石占忌寸同祖。阿智王之後也。(摂津国諸蕃)

牟佐呉公 呉国王子青清王之後也。(未定雑姓 摂津国)

さらに、『続日本紀』天平神護2年に、武庫郡の大領として「日下部宿禰浄方」の名がみえ、日下部氏もまた武庫郡に勢力を有していたものであろうか。

以上のように、律令時代において武庫郡に居住したと思われる氏族を列記したが、これらすべての氏族がほんとうに居住したかどうかは不明である。たとえば曾禰連などは氏族名と郷名が一致するだけで、ましてや『新撰姓氏録』には「和泉国神別」とされている。

また、たとえこれらの氏族が居住していたとしても、群集墳の造営された6世紀後半に逆上り得るという確証は無い。むしろ『新撰姓氏録』の時代と群集墳造営の時代が200年以上もの隔りがあることを考えた場合、安易に両者を結びつけることを避けるべきであろう。

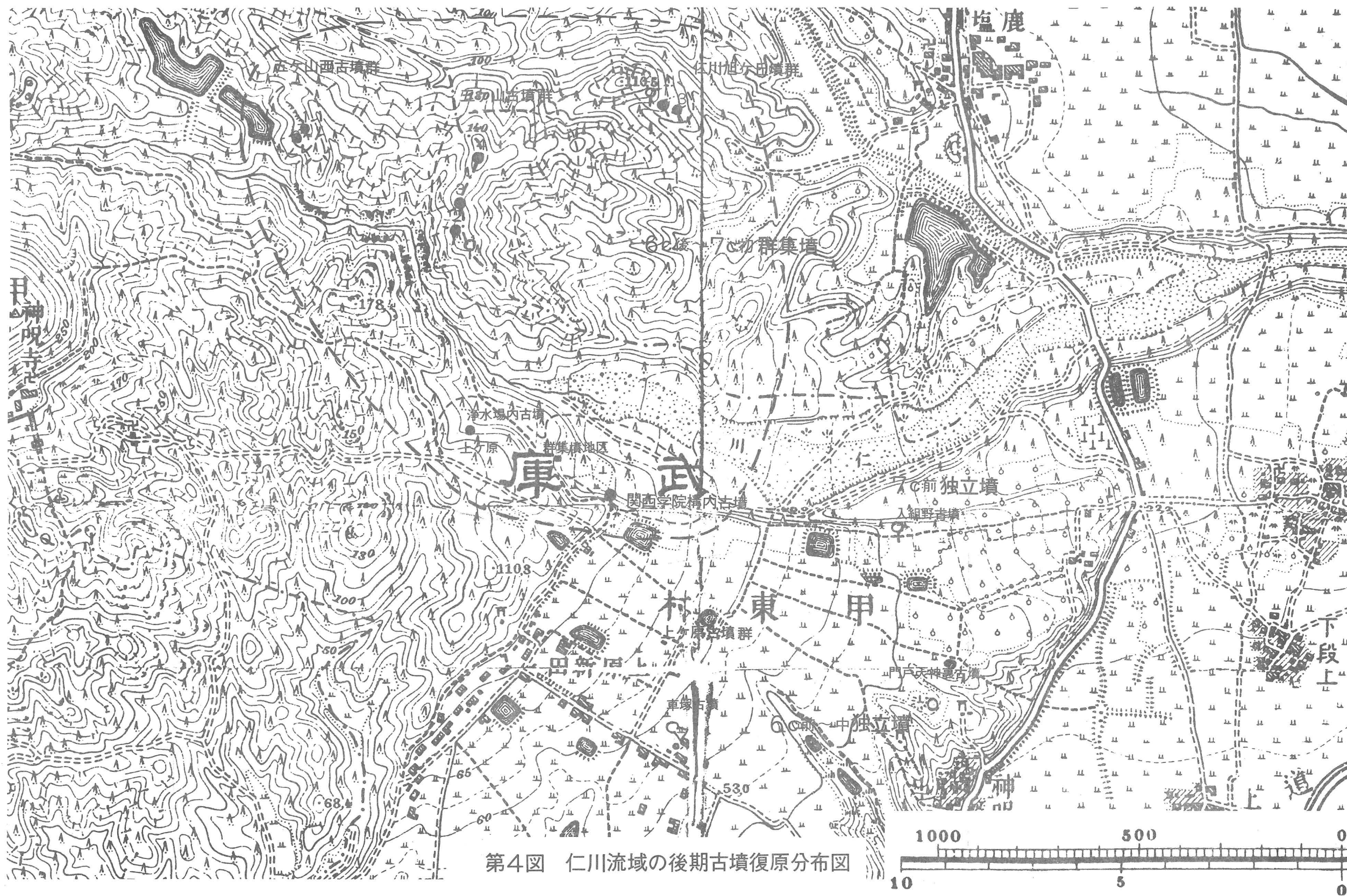
このように後世の史料をもって仁川流域の古墳群の被葬者を類推することは困難である。しかしすでに見てきたように、仁川流域の古墳群には群構成、立地、時期差による三つの時期を捕えることができた。すなわち、6世紀前～中葉上ヶ原台地上に独立墳が造営された時期、6世紀後半から7世紀初頭仁川に近接して四群の群集墳が形成された時期、そして7世紀前半仁川南岸に独立墳が築かれた時期である。このように古墳築造量が6世紀後半から7世紀初頭にかけての群集墳形成期に頂点に達し、7世紀前半に入ると消滅の一途をたどるという傾向は、近畿地方の後期古墳においてほぼ同様である。そしてこの仁川流域においてもその例外でなかったことを知るわけである。しかし仁川流域の場合、その同様な流れの中にもいくつかの特徴を次のように挙げることができる。

- (1) 6世紀前半から7世紀後半まで一応連続して古墳が見られること。しかし各時期の古墳が同一氏族の造墓の結果であるかどうかは不明で、今後の検討を要するであろう。
- (2) 6世紀前～中葉の独立墳の内、車塚古墳は前方後円墳であると考えられること。西摂地方の後期古墳において他に前方後円墳の例が見られないだけに注目される。
- (3) 7世紀前半、一般に古墳築造量減少の中で、群から離れて独立墳が築かれたこと。7世紀前半に入っても群集墳形成が継続する場合には、そのまま継続して群内に造墓する例、新たに群及び支群を形成する例等がある。この点入組野古墳の場合、群から一定の距離を保って築造されていることは注目に値する。

以上の様に仁川流域の後期古墳の特徴と問題点を見てきた。しかしまだまだその持つ問題は多く、消化されていない点が多分にある。たとえば西摂地方、さらには近畿地方全体の中でのこの古墳群の位置付け等であるが、今後の課題として究明してゆきたいと考えている。(双岡)

註

- ① 武藤誠「考古学から見た古代の西宮地方」 （『西宮市史』第1巻 昭和34年）
- ② 武藤誠「西宮市上ヶ原入組野在横穴式石室古墳の発掘」 （『関西学院史学』Ⅴ 昭和34年）
- ③ 紅野芳雄『考古小録』 （西宮史談会編 昭和25年）
- ④ 小林行雄「技術から見た古墳の様式」 （『考古学』第5巻第6号）
- ⑤ 武藤誠教授の御教授による。
- ⑥ 「埋蔵文化財調査報告」 （『西宮市史』第7巻 昭和34年）
- ⑦ 西宮市教育委員会『西宮の文化財』埋蔵文化財篇 （昭和49年）
- ⑧ 仁川旭ヶ丘古墳群調査委員会『仁川旭ヶ丘古墳群調査報告』 （昭和47年）
- ⑨ 図版6の21～26参照
- ⑩ 図版6の31～34参照
- ⑪ ⑦に同じ
- ⑫ 吉井良秀『武庫の川千鳥』 （大正10年）
 吉田東伍「武庫郡」 （『大日本地名辞典』）
 渡辺久雄「国郡制下の地方条里の一例、一武庫郡条里を中心として」 （『条里制の研究』所収
 昭和43年 創元社）
 田岡香逸『西宮地名考』 （昭和45年）
- ⑬ 尼崎市教育委員会『尼崎市上ノ島遺跡』 （尼崎市文化財調査報告第8集 昭和48年）
- ⑭ 西宮市教育委員会『西宮市埋蔵文化財遺跡分布地図及び地名表』 （昭和49年）
- ⑮ ①に同じ
- ⑯ 渡辺久雄前掲論文
- ⑰ 邨岡良弼『日本地理志料』巻之五
- ⑱ 吉井良秀前掲書
- ⑲ 佐伯有清『新撰姓氏録の研究・本文編』 （昭和37年 吉川弘文館）
- ⑳ 邨岡良弼前掲書
- ㉑ 渡辺久雄前掲論文



第4図 仁川流域の後期古墳復原分布図

第2表 仁川流域の後期古墳一覧表

古墳群名	古墳名	墳形	墳前方後	墳形	墳径	墳丘高	内部主体	石室形態	石室主軸	開口方向	玄室長	玄室幅	玄室高	羨道長	羨道幅	羨道高	備考
上ヶ原古墳群	車塚古墳	前方後円墳	台地中央	58m			横穴式石室										消滅
"	門戸天神裏古墳		台地突端	約40m			"										消滅
"	浄水場内古墳	円墳	尾根上	100m			"	右片袖式	東								墳丘は旧状を損じ、石室一部破壊
"	関学古墳	"	台地縁辺	70m	18	3	"	"	N12°E	南	4.98	1.5	2.4	3.28	1.2	1.6	
"	入組野古墳	"	台地上	48m	17	1.5	"	無袖式	南北	南東	2.3	0.66	0.9				消滅・移築
五ヶ山古墳群	1号墳		尾根上	135m			"		正南北	南	4 ⁴ (石室現存時)	1.0	1.4				消滅
"	2号墳	円墳	尾根上	135m	15		"	両袖式	南北	南	4.5	奥壁部1.7 玄門部2.4	2.0	5.5	1.8		
"	3号墳	"	尾根上	140m	13	2.5	"		N5°E	南	7	1					
"	4号墳	"	尾根上	142m	18~20		"		N19°E	南	10	1.4	2				
五ヶ山西古墳群	1号墳	"	尾根上	152m			竪穴式石室		N12°W		1.6	0.5					
"	2号墳	円墳?	尾根上	150m													花崗岩の石列がみられ、古墳の可能性あり。
仁川旭ヶ丘古墳群	1号墳	円墳	尾根上	68m	25		横穴式石室	右片袖式	N52°W	南東	4.5	2.1	2.1	4.5	1.5	(2.0)	
"	2号墳	"	尾根上	76m	12	4~5	"	"	南北	南	3.9	1.7		3.2	1.45		消滅・移築
"	3号墳	"	尾根上	63m	14		"	"	N20°W	南	2.5	1.4		2.5	1.0		

お　わ　り　に

今、阪急今津線を仁川で下車し、川沿いを西へのぼると、径は、五ヶ山を經由して、仁川ピクニックセンター、甲山森林公園に通じる。ここは、日曜、祝日ともなると、多くの行楽客でにぎわう阪神地方に少ない自然を多く残した絶好のハイキングコースである。目前には、豊かな緑を抱き六甲連山をバックに、甲山の美しいシルエットが迫る。甲山は、かつて^{こうのやま}神山と呼ばれ、神聖視されていたという。

この神なる山、甲山を望む仁川流域に、本書で述べた後期古墳が、かつて数十基の群集をなして、存在していたのである。この規模は、六甲南麓における八十塚古墳群に匹敵するのだが、現在は、わずか9基が遺存しているに過ぎず、多くの古墳は調査もされないまま、失なわれていったため、今まで注目されることが少なかった。

今回の研究に際しては、かろうじて残った僅かの遺跡と文献が、過去の姿を想定する資料のすべてであった。特に復原作業は我研究会の非力さに、困難であったが、このように、成果が報告され得たのは、ひとえに、武藤先生をはじめとする諸先輩方のあたたかい御指導の賜物である。ここに、厚く感謝の意を表する。

なお、『関西学院考古』3号の刊行にあたり、尼崎市教育委員会橋爪康至氏、芦ノ芽グループの藤川祐作氏、松田和義氏、古川久雄氏の御協力を得た。今後ともこの分野の研究に御役に立つことを願っておわりとしたい。

最後に当研究会発足以来常にあたたかい御指導をいただきました武藤 誠先生は今年8月を以て関西学院大学文学教授を御退任されました。本書はささやかながらその記念の一つともなれば幸いです。